

# 海外臨床薬学研修報告書

---

薬学部薬学科 110973149 原 かをり

私は2015年7月26日から8月9日の期間、アメリカ合衆国カリフォルニア州にある南カリフォルニア大学（USC）薬学部および関連施設での海外臨床研修に参加した。

今回この研修に参加しようと思ったきっかけは、日本より進んでいるといわれているアメリカの薬剤師とそれをめぐる環境、また、アメリカの薬学生の姿勢が日本とはどのように違うのかを実際に見てみたいと思ったからだ。また、病院での実務実習を控え、今回の研修を通しアメリカの病院薬剤師の業務を知り、日本の病院での薬剤師の業務と比較したいと思ったのも理由のひとつである。

今回の研修で、私たちは主に日本の他大学からの留学生と韓国からの留学生とともに講義を受け、そのほかに大学関連施設の病院 Keck Medical Center, Norris Cancer Hospital と薬局 Plaza Pharmacy、また地域の薬局 El Monte Independent Community pharmacy を見学をした。

病院の見学では、薬剤師が実際に働いている現場を見るより、薬剤師がどのように働いているのかの説明が主だったため、アメリカの現場の薬剤師がどのように働いているのかは想像するしかなかったが、職域の幅が日本と違うことにとっても驚いた。例えば、投与量の変更など薬剤師が薬学的観点からおかしいと感じた場合は、医師に問い合わせることなく投与量を変更できる。また、病院の採用医薬品を決定するための会議に薬剤師も参加し、その病院に必要とされる薬について医師やほかの医療スタッフと議論することができる。このようなことは日本の病院では行われていないので非常に興味深かった。薬剤師が医師に確認することなく投与量を変更できるというのは、薬剤師が薬に関するケアを任されているということであり、そこからアメリカでの薬剤師の地位の高さがうかがえた。日本でも同様に、薬剤師が薬に関するケアをすべて任されるためには、なにをしていくべきか考えるきっかけとなった。

大学敷地内の薬局 Plaza Pharmacy では、カウンセリングルームを見学し、そこではインスリンの自己注射の方法を患者に教えたり、旅行医療についての患者教育や予防接種を行ったりしていた。その中で、日本との違いで興味深かったことは、アメリカではボトルによる調剤が中心であり、散剤は主に子どものためにしか作られず、嚥下困難な高齢者のためにはほとんど作られないことだ。日本では、昨今地域の薬局で在宅医療の重要性が叫ばれており、そのなかのサービスとして一包化調剤や残薬調節、在宅でのカウンセリングが行われているが、アメリカでは家への薬の配達が行われること以外在宅医療と呼ばれるようなことは行われていなかった。そこは、高齢化の進む日本ならではの感じられ、日本のよい特徴のひとつだと感じた。

地域の薬局である El Monte Independent Community pharmacy では、多数のクラークとテクニシャンに対し、薬剤師はふたりのみという形で一日に800枚から1000枚の処方箋を受けていることに驚いた。調剤はほとんどテクニシャンが行い、また調剤ロボットの活用により医療ミスを減らしていた。調剤をテクニシャンが行い、薬剤師が監査と投薬をすることで、処方箋の受け取りから投薬までが非常に効率化されていると感じた。

日本では、現在はテクニシヤンの制度は導入されていないが、今後導入が検討されている。テクニシヤンの導入により、薬剤師が患者ケアにかけられる時間が増えることは非常によいことであるが、今以上に患者ケアに重点を当てた教育が求められるのではないかと感じた。

講義は SOAP ノートと患者カウンセリングに関する講義と精神科領域疾患（うつ病と気分障害）についての症例検討について学んだ。SOAP ノートに関する講義に関しては、私たちが日本で習っていた内容とほとんど同じで、S・O・A・Pにはそれぞれどのようなことを記載するべきなのかという内容であった。患者カウンセリングに関しては、患者に伝えるべき情報として何があるかを考えたのちに実際にロールプレイをして患者と対応する練習まで行った。日本での服薬指導の練習に似ていたが、患者の理解度を確認しながら、説明を行うという点で違いが感じられた。上でも述べたように、日本とは異なり、アメリカではボトルによる調剤が基本であるので、1回服用量や服用回数などしっかりと患者に理解してもらう必要がある。そのため、一通り薬剤師からその患者に必要な情報を伝えた後、重要な事項を質問し患者の理解度を確認する。さらに、簡単に説明の内容を要約し繰り返すことで記憶に残りやすくなるよう工夫されていた。

アメリカのさまざまな学生団体は、アメリカ全体の規模で患者カウンセリングを競う競技会を開いて、日々よりよい患者カウンセリングについて学んでいる。日本では、多くの場合 OSCE と実習でしか患者カウンセリングに重点を置いた勉強はしないので、非常に興味深かった。

研修全体を通して、アメリカの薬学生は非常に臨床に近い教育を受けており、現場に出たら即戦力となれるように実習を積んでおり、モチベーションも高いと感じた。また、薬剤師も高い地位を確立し、薬の責任者とも呼べるような仕事をしている。ここには日本が学ぶべきところが多くあるのではないかと思った。日本の薬学生は、普段の机上の勉強が将来の患者にどのように影響を与えるのか感じるができないので、高いモチベーションを保つことは難しい。アメリカでは低学年から病院や薬局で実習を行うことで、薬剤師が現場でどのような仕事をしており、自分にはどのような知識が必要であるのか感じる機会が多数あるのではないかと思う。今回学んだアメリカの良さと日本の良さについて、さらに考察を深め、多くの人に伝えることでよりよい日本の医療につながるのではないかと感じた。この研修で、日本とアメリカとの違いを肌で感じることができ、これから自分が薬剤師になるうえでなにをすべきか少し明確になったように感じる。このような機会を与えてくださったすべての方に感謝したい。